高知学園大学・高知学園短期大学紀要　第53号（2023）：29－39

報　告

学生の誇りを支援する環境としての大学図書館の意義
―植物分類学に関する蔵書と社会的アイデンティティに着目して―

吉村　斉[1]*，森原　誠二[2]

要約：本研究は，著名人の功績と自校史との関連から，学生が学ぶことに誇りを抱くことを支援する大学図書館の意義を考察したものである。特に，本研究では，植物分類学に関する蔵書と社会的アイデンティティとの関連に着目して考察を行った。「日本植物学の父」といわれる牧野富太郎博士は高知学園大学・高知学園短期大学（以下，「本学」と略記）が位置する高知県の出身である。本学図書館には，２名の名誉教授が執筆した植物分類学に関する図書が残されている。彼らは研究を行う過程で，牧野博士から直接的・間接的な影響を受けてきた。そこで，社会的アイデンティティ理論に基づくと，もし学生が牧野博士とその名誉教授に関する歴史を理解すれば，学生も自分の大学が彼の功績と関連していることを感じるかもしれないことを推察した。その結果，学生は本学で学ぶことに対する誇りを抱くことができるだろう。それゆえ，図書館で蔵書が刊行された話題に関する情報を発信することは，学生の学生生活の充実に寄与する上で意義があると考えた。

キーワード：大学図書館，誇り，牧野富太郎，植物分類学，社会的アイデンティティ

はじめに

文部科学省（2010）は，大学図書館の機能・役割として「学習支援及び教育活動への直接の関与」，「研究活動に即した支援と知の生産への貢献」，「コレクション構築と適切なナビゲーション」，「他機関・地域等との連携及び国際対応」の４点を挙げている。これらを果たす過程では，図書（電子図書等含む）の活用を通した教職員や学生の教育研究活動の充実はもちろん，その延長にある人々の成長が願いとして込められ，その支援を実現できる図書館としての工夫が求められている。

人々の成長を支援する上で重要な要因の１つに所属感が挙げられる（Smith, 2018）。所属感が満たされることによって，自分のことを認めてもらおうとしたり，自分の限界に挑戦しようとしたりする動機が生まれることは，Maslow（1970）の欲求階層説からも長年示唆されてきた。人は，所属感を覚えることによって安心し，その集団に所属したい気持ちをいっそう強化する。その過程を経て，自尊感情を高め，成長を遂げていくのである。

自尊感情の向上を規定する要因の１つとして「誇り（pride）」がある（Hart & Matsuba, 2007）。大学生の心理で例えると，「この大学に入学してよかった。この大学で学び続けたい。」と思う気持ちと深く関連する。近年の教育では，探求する

[1] 高知学園大学　健康科学部　管理栄養学科　*Email: hyoshimura@kochi-gu.ac.jp
[2] 高知学園大学・高知学園短期大学　図書課

態度の育成が求められている。図書館も，デジタル化に伴う情報収集と学習への活用を実現する場として注目されている。それは，学生が自分たちのペースで学び，理解を深めたり気づいたりする体験の場として期待されていることを意味する。

大学図書館に関する研究においても，近年は情報化などのハード面やレファレンスサービスなど図書館業務の効果に焦点を当てた研究を中心に発展している。一方，学生の心理や成長など内面に焦点を当てた研究もある。その１つが油谷(2021)である。この研究は，自校史教育と未来に資する部分を加えた自校教育を通じて，愛校心の育成やアイデンティティの確立を目指す取り組みを図書館で行った点で特徴のある事例と思われる。

湯川・久保田・野口・大岡・大岡（2016）によると，自校史教育では愛校心の醸成でとどまるのではなく，社会的な責任を自覚し，主体的に学ぶ意識・態度を養うことを目指さなければならないことが指摘されている。特に私立大学の場合，建学の精神に基づくアイデンティティの追求を求める過程で自校史が常に意識されている（山口, 2003)。油谷（2021）は，これらの特性を生かし，創立者に関する資料を展示して卒業生の活躍や地域貢献なども伝えることで，学生のモチベーション向上や自分の理想像につながることを期待した大学図書館の取り組みを紹介している。その取り組みでは，学内にとどまらず，自校史教育の先にある医療人の意欲を掘り起こして視野を広げる教育を図書館として目指している。この理念に基づくと，今後，大学図書館が学生の誇りを育み支援する環境の一部になることは，学習支援や休退学防止に寄与するだけでなく，将来の夢を具体化して，より実践的な目標へ洗練させる役割を果たす上でも意義があると考えられる。

そこで，本研究では，高知学園大学・高知学園短期大学（以下,「本学」と表記する。）における歴史と，一見本学とは無縁と思われる著名な人物との関連性を，蔵書を通して紹介することで，学生がその魅力や価値に気づき，本学で学ぶことに「誇り」を抱くよう方向づける環境構築を検討する。その上で，学習意欲や大学生活への適応の向上，将来像の具体化に寄与する可能性を探るとともに，その実現と発展に向けた課題を整理する。

社会的アイデンティティに着目した図書館として試みる学生の成長に対する一助

人は，対象物を身近な存在と感じた時，心の変化が起こる。例えば，これまでに関心のなかったスポーツの種目であっても，オリンピックで日本人選手が頑張っている姿を見れば，無条件に応援したくなる。世間では，この現象を人情と表現することもある。ただし，この現象は決して偶然ではない。自分が国や都道府県など集団に所属している意識，すなわち社会的アイデンティティによるものである。

この社会的アイデンティティに基づくと，人は「あの人は自分と同じ」と捉えることによって，その人物に対する行為や関心を高めていく。ある有名人の出身校や出身地が自分と同じであることを機に親近感を覚えることは珍しくない。ただし，それだけで自尊感情の向上には届かない（山本・松井・山成, 1982)。そこで自分で何を感じ，何に気づき，何を学ぶかが問われるからである。

本学図書館が着目したことは，図書を通じて学外の著名者や出来事と本学との意外なかかわりを感じる試みである。興味・関心は，意外性や矛盾を感じることで喚起される。まずは概念的葛藤を引き出す話題を提供し，そこから学生の興味・関心を喚起することで，その人物の価値観や姿勢を同一視したり，感じ広げたりすることを目指す。次に，自分が在籍する本学との所縁を通して関連性を覚えるとともに，その社会的アイデンティティを通して徐々に本学で学ぶことを誇りに思える一助を担うことを目指すこととした。

なお，この過程で期待できる効果は間接的な水準である。この試みによって，文部科学省（2010）が示す４つの役割・機能を直接果たすことにはならない。誇りを抱いた延長線上として，授業内外における学習促進や所属感の向上など学習支援及び教育活動に対する動機づけの基盤を提供するこ

とが目的となる。もっとも重要なことは，授業を通した学習成果の獲得であることが大前提にある点は留意しておかなければならない。

蔵書でみる「牧野富太郎博士から本学に伝わる植物分類学研究への想い」

植物学者の牧野富太郎博士（以下,「牧野」と表記する。）は高知県佐川町で生まれ，日本全国をまわって膨大な数の植物標本を作製した「日本植物学の父」である。牧野が日本の植物分類学研究を切り拓いて探求し続けたことで，研究成果の大衆化にも寄与した功績は今なお高く評価されている。

本学図書館には，２名の名誉教授が著した植物分類学に関する書籍が残されている（表１）。著者は，いずれも直接的または間接的に牧野の影響を受けた者である。以下では，その２名による著書の概要と牧野とのかかわりを紹介する。

１　蘚苔類研究者・上村登・名誉教授の著書

牧野は1957年に94歳で亡くなったため，1967年に開学した高知学園短期大学との直接的なかかわりはない。ただし，開学時から本学で教鞭をとった上村登・名誉教授（以下,「上村」と表記する。）は，牧野を師と仰ぎ，その牧野から蘚苔類の研究を薦められるなど，植物採集会等を通して直接指導を受けてきた１人である。

上村は，1944年に『土佐の植物』を共立出版から出版した（2022年９月末時点で本学図書館の蔵書にはない）。当時は『牧野日本植物図鑑』が1940年に刊行されて間もない時期であり，高知県に特化して植物をまとめた書籍もほとんどなかったと思われる。それゆえ，高知県の植物界におけるパイオニア的存在であったことが推察される。

1965年には六月社より『南四国の自然』を編集して出版した。この著書では，植物に加えて動物や昆虫，鉱物などの研究者と協力し，自然を総合したハイキングコースになぞらえてユニークな説明をしている。

さらに，1973年には『なんじゃもんじゃ～植物学名の話』を北隆館より出版し，和名で知っている植物に実は世界共通の学名があることを身近な事例やエピソードを交えてわかりやすく紹介している。このように，上村は専門的な研究だけでなく，著書を通じて一般の人々にも植物への興味・関心を高めるよう活動してきたことが示唆される。おそらく，牧野との交流を通じて体得した植物分類学の大衆化に対する想いを教育活動にも反映させていったと思われる。

牧野と上村とのかかわりは，上村の著書『花と恋して～牧野富太郎伝』で詳しく述べられている。とりわけ，牧野から直接指導を受けた上村だからこそ描写できる牧野の姿が満載である。特筆すべきことは，喜び，悲しみ，驚き，妬みなど，本人と周囲の人物との間で繰り広げられた感情の動きは，臨場感あふれる描写となっている点である。

表１　本学図書館に残された名誉教授による植物分類学研究に関する著書（2022年９月30日時点）

著者名	上村　登	吉村　庸
著書名	・南四国の自然（上村登編）, 1965, 六月社 ・なんじゃもんじゃ～植物学名の話，1973, 北隆館 ・花と恋して～牧野富太郎伝, 1999, 高知新聞総合印刷（2022 年復刊）	・原色日本地衣植物図鑑, 1974, 保育社 ・*Identification of Lichen Substances* (Siegfried Huneck, & Isao Yoshimura), 1995, Springer Verlag

※本研究では，単著書，共著書，編著書など奥付に氏名が掲載され，出版社から刊行された書籍を著書と定義し，分担執筆などの書籍は考察の対象外とした。

牧野に限らず，著名人に対しては，苦労体験から成功体験に至るサクセス･ストーリーを中心に，人物像を大きく誇張して語られがちである。しかし，上村は研究活動の過程だけでなく，植物採集会で牧野が見せた言葉のやりとりも具体的に表現し，「人間・牧野富太郎の素顔」を感じる表現を貫いている。例えば，ある植物採集会において，夕立が来そうになったために中断を相談しても，植物の説明に没頭する牧野の姿とその言葉のやりとりを紹介した場面はその代表である（pp.286-297参照）。それは，植物採集会で牧野の世話をし続け，常に牧野の近くで活動していたからこそ実現できた描写であると思われる。その魅力にあふれる著書は，真の牧野富太郎博士を知る人物だからこそ完成させることができたものである。1999年に出版されたこの書籍は，2022年に新装復刊されて再び書店に並べられている。それほど，多くの人々が魅せられた牧野像を描いた著書といえる。

２　地衣類研究者・吉村庸・名誉教授の著書

地衣類を専門とする吉村庸・名誉教授（以下，「吉村」と表記する。）は，1975年に生物学を担当する教員として高知学園短期大学に赴任した。上村とはその時に同じ職場で働く教員同士として出会った。ただし，２人の出会いは研究者になる前から始まっていた（上村登『草と木と花と』pp. 61-66参照）。

最初の出会いは吉村が中学生の頃であった。吉村は自分で採集した地衣類の「ハナゴケ」をもっと知りたいと思い，自校の生物担当教師より上村を紹介してもらった。上村は高岡中学校（現・高知県立高岡高等学校）の教員であったことから，吉村は伊野まで路面電車で行き，そこからは徒歩で土佐市高岡町を目指した。途中で渡る仁淀川に，当時は橋がかかっておらず，渡し船で高岡に行ったエピソードも紹介されている。以後，間接的とはいえ，牧野の植物分類学研究に対する想いと姿勢が上村から吉村へ継承されていくこととなる。

1974年，吉村は『日本地衣植物図鑑』を保育社より刊行した。これは今でも日本の地衣類を扱う唯一の図鑑となっている。多くの地衣植物がカラー図番で紹介され，当時としては画期的で，地衣類を勉強する誰もが活用したことを原田(2022)は紹介している。出版から数十年経過し，内容の修正や追加が必要とされ，改訂版を望む声も多くなった（原田・岡本・吉村, 2005）。しかし，それは2022年現在でも実現していない。それほど，図鑑製作を成し遂げることは緻密で過酷な作業であることが想像される。

1996年には『*Identification of Lichen Substances*』をドイツのDr. Siegfried Huneck（以下，「Huneck」と表記する。）と共著でSpringer Verlag（Berlin）より出版した。この著書は地衣成分の構造や物理的データをまとめたものである。そして，地衣類を化学から研究する者にとっては貴重な文献として位置づけられている（地衣類観察会, 2022）。

ただし，この本を完成させるまでの過程は苦難に満ちていた。Huneckはドイツで，吉村は高知学園短期大学で研究活動を進めていた。両者はお互いの研究成果を認め合い，学術論文を通じて交流を深める関係にあった。しかし，当時のドイツは東西に分かれ，Huneckは東ドイツに住んでいた。それゆえ，共産主義の東ドイツでは国際学会への出席を理由に国外へ出ることが許可されなかったのである。

その後，1989年11月９日に起きた「ベルリンの壁の崩壊」が大きな転機となり，東西のドイツが統一された。その結果，Huneckは自由に国際学会へ出席することが可能となった。共同研究は，２人の対面をきっかけにますます進むこととなった。その集大成が本書である。

1993年，Huneckは，神奈川県横浜市で開催される第15回国際植物科学会議に出席するため，来日した。会議以外でも，彼の研究に注目する企業等で講演を行うなど，日本滞在中は多忙を極めた。その状況であっても，彼は高知県を訪れて伊野町（現・いの町）で講演を行い，世界規模や地域に合わせた話題で地衣類の魅力を伝えた。まさに，本づくりで結ばれた高知県との縁であった。

このように，冷戦時代の政治的事情に屈するこ

となく，ともに未来を見ながら研究活動を継続したからこそ，本書は完成したと思われる。そして，その中には本学で研究された多くの成果が含まれている。

３　２名の名誉教授と牧野とのつながりを結ぶ人物

ここまで，上村と牧野とのかかわりは明白なものであった。しかし，牧野と吉村との間接的なつながりはまだ不透明である。ここで，ある人物を介して間接的でありつつも重要なつながりが見えてくる。それが朝比奈泰彦博士（以下，「朝比奈」と表記する。）である。

学歴に恵まれなかった牧野が東京帝国大学で研究を行うことができたのは，彼の研究を支援する者がいたからである。その支援者の代表的な1人が朝比奈であった。牧野と朝比奈は，東京植物同好会で研究を重ねて交流を深めた。朝比奈は，牧野の才能を認めるよき理解者でもあった。日本の植物研究として初めて本格的な学術誌といえる『植物研究雑誌』には，創刊当時からお互いに論文を発表したり雑誌を編集したりして，日本における植物研究の発展を推進していった。

牧野没後に発足した牧野植物同好会では，朝比奈が初代会長を務めた。それほど，２人の信頼関係は強いものであった。そして，吉村は，その朝比奈から指導を受け，地衣類の研究に邁進したのである。

この指導過程では，牧野の植物研究に対する姿勢や想いが吉村にも強く伝えられた。それを示唆するエピソードも見られる。例えば，朝比奈が既に発見していた地衣類の種に誤りがあることを吉村が見出し，異名であることを発表した（朝比奈，1971）。真実を追求するために研究を徹底し，それを認めるお互いの姿勢は，自ら納得するまで探求し続けた牧野の研究生活と重なるように思われる。

1975年春，上村と吉村は高知で再会した。２人は，高知学園短期大学で牧野から学んだ植物を愛する心と探求心を継承して，教育研究活動を推進することとなる（図１）。

1996年，吉村は，所属していた教養教育の教員と共同してゼミナールにおける学生のレポートと指導記録をまとめ，『短期大学からの挑戦～高知学園短期大学 教養教育の実践記録』を南の風社から出版した。植物採集会で多くの後進を指導していいた牧野の想いと，卒業研究が課されていなかった短期大学生に研究活動の実践と成果をまとめて発表する学習をカリキュラム化した教養教育の想いには，創造性を発揮して自ら未来を切り拓く若者を育てようとする願いが共通していたと感じられる。とりわけ，短期大学における知的財産の重要性を研究と教育の観点から考察し，学生だけでなく教員の資質にまで言及した点（pp.11-12参照）は，当時の短期大学像に異を唱え，短期大学の新たな価値と方向性を示すものであった。それは，まるで現在の高等教育機関における質保証の問題を予測していたように論じられていた。

一方，このゼミナールで地衣やシダなどの植物研究に取り組んだ学生の多くは，自然に触れ，顕微鏡のレンズを通して出会った美しい景色に感動した体験から，自ら学ぶことの魅力を感想に述べていた（pp.34-102参照）。上村もまた，植物採集会で自ら発見する喜びの重要性を認識していた。学生の感想より，上村の想いも込められたゼミナール活動であり，牧野に関する伝統が組織的に継承されていた証とも考えられる。

社会的アイデンティティ理論に基づく「誇り」と学生支援に注目した考察

学生が，自分の所属する大学に対して好感を覚える心理に社会的アイデンティティが影響していることは既に述べた。その状態に対して誇りを抱くことが，大学での学習を継続する意欲を高めることも，多くの研究で示唆されている。そこで，ここからは社会的アイデンティティの理論的背景と関連づけて考察していく。

社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turnrer, 1979）によると，人は所属集団によって自己を定義し，社会が自己のアイデンティティを評価するために所属集団をどのように扱っている

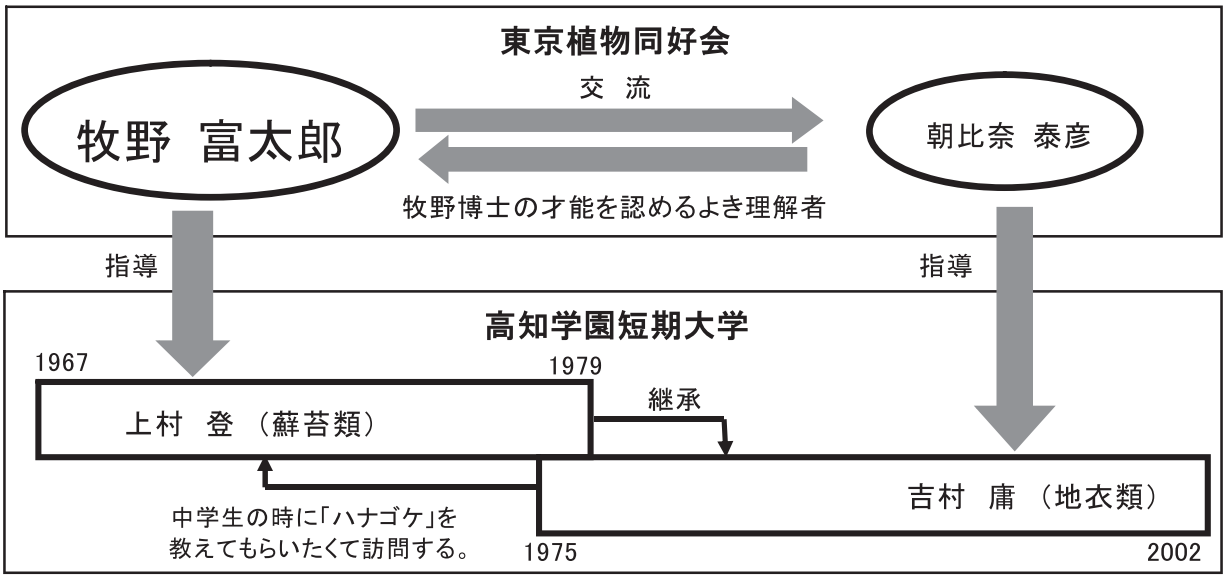

図１　牧野，朝比奈，上村，吉村の関係図

かをアセスメントしている。そして，肯定的な社会的アイデンティティを感じる集団において，人は集団への忠誠を誓ったままでいる（Doosje, Ellemers, & Spears, 1999）。これらの先行研究に基づき，早瀬・坂田・高口（2011）は，所属集団の地位が好ましいと評価された場合，好ましい社会的アイデンティティを維持し高揚するように動機づけられ，その所属集団に協力する関係を説明している。つまり，自分が通う大学を高く評価することによって，その評価されている事柄に関与する当事者として自分自身を認識し，その大学に留まろうとする。さらに，より高い評価を感じるために活動意欲が高まるとともに，その実現のために仲間とも協力するようになるのである。

また，Tyler & Blader（2001）によると，所属集団への評価が高い場合，人はその集団に所属していることへ「誇り」を感じ，所属する集団に対するアイデンティティが強くなる。さらに，集団存続に重要となる協力行動と「誇り」との関連についても分析したところ，誇りは規範遵守の行動を高め，離職意志を低下させることと関連していた。以上のことから，早瀬・坂田・高口（2011）は，所属集団に「誇り」を感じることのできる人ほど，その集団の規範を遵守すること，そしてその結果として定められた役割やそれに関する他の役割を果たす間接効果をもたらす過程を示している。

他方，「誇り」は所属集団内の行動だけでなく，個人の発達にも影響を及ぼす。例えば，Brown & Marshall（2001）は，誇りとは自尊感情に影響を与える主たる感情であると指摘している。Tracy & Robins（2004）によれば，誇りが肯定的行動を促進し，さらに自尊感情を向上させていくことも示されている。それゆえ，いずれの分野においても積極的に活動して責任を果たしていくためには，所属集団に対しても自分自身に対しても誇りを抱くことが，人間発達に向けた重要な課題になると考えられる。大学においても，学生が主体的に学べるか否かは，授業や学生生活を通じて「誇り」を抱くことに規定されるといってもよいだろう。

ただし，原因帰属に基づいて誇りを検討したTracy & Robins（2007）によると，能力のような内的，安定的，統制可能な原因に帰属していると，それは誇りではなく「思い上がり」となる。努力のように，自分の成功経験を内的で不安定，統制可能な原因に帰属する場合において，真正な誇りを感じるのである。したがって，誇りを経験して蓄積できるようになるためには，適切に自己を統制しながら，自分の努力によって成功したり失敗したりしたと捉えるよう習慣化する発達過程が重

要になると考えられる。

以上の理論的背景に基づくと，学生が「誇り」を抱くためには，まず所属している大学の肯定的な特徴を自分自身で認識できることから始まる。それは，入学前の学力偏差値など外部比較・評価よりも，むしろ入学後の学習成果や進路決定状況，あるいはボランティア活動や社会活動，さらに歴史と伝統への関与など，入学後に覚えた成長の実感が対象となる。

Heider（1958）のp-o-x理論に基づくと，自分自身を含む３者の関係において，人は調和のとれた関係づくりを目指す。特にすべてが肯定的な関係になれば，安定した心理状態を生み出し，人間関係が形成される。あらゆる人間関係にはルールが存在し，ルールによって規定される（Argyle & Henderson, 1985）。つまり，ルールを遵守することで人間関係が維持されることが示唆される。さらに，Hogg & Abrams（1988）によると，人は社会的カテゴリーのメンバーとして自分自身をカテゴリー化することで規範的となる。早瀬・坂田・高口（2011）も述べたように，その原因として誇りを抱くことは有力な要因の1つである。その意識を共有することで大学の活性化を図ったり，個々人の生き方を考えることによって大学で学ぶ意義を考えたりする効果を目指して自校史教育が行われている（湯川・久保田・野口・大岡・大岡，2016）。従来の自校史教育では，自大学に直接関係する人物との関連性を組織的に取り上げる事例が多くみられた。

しかし，興味・関心は矛盾を覚えることから概念的葛藤が高まることで内発的に引き起こされる（Berlyne, 1965）。それゆえ，矛盾を与える点に限れば，意外性を覚える著名な人物の方が効果的であると予想される。さらに，榊原・安田・若杉（2015）によると，大学の伝統とは，組織的というよりも，個人を通じて形成・継承されることが示唆されている。当然ながら，図書においては，個々人が図書の内容より自分の考えを深化させながら自己像を形成していく形で影響を及ぼす。そこで，本研究では試みとして牧野富太郎博士と本学との関係について，図書を通じて検討し，そのきっかけとなる可能性を考察したのである。

以上の考察に基づくと，この関連性を伝えることで，牧野博士との「何らかのつながり」を学生が感じとり，「本学だからこそ」という独自性のある魅力に気づき，その伝統を継承して自らも成長しようと動機づけられる大学になることが理想的な大学像の一例になると考えられる。その実現のためには，各部局が他の部局の役割も理解しあいながら学生指導と支援を通して育む自分たちの特性を明確にすることから始まる。その中で，図書館としては図書を軸にした１つ１つの取り組みが，学生のどの学びや成長を支援し，誇りを育むことにつながるのかを吟味しながら情報を発信することが大切な役割であることを常に自覚しなければならない。

今後の課題

本学図書館には，さまざまな資料が所蔵されている。そして，それらの作成過程には作成者にしかわからないドラマが詰まっている。中には，もはや埋もれてしまった魅力も潜んでいる。その魅力を発見したり気づいたりすることができれば，本学の独自性や魅力を見つめ直すきっかけにもなる。「誇り」とは瞬時に生まれるものではなく，経験を積み重ねた延長線上に感じるものである。つまり，歴史と伝統が誇りを形成していくのである。

人は何かの集団に所属しており，社会では所属集団で責任を果たすことが求められている。一連の研究を概観すると，その基盤にある個人要因の１つとして，所属集団に「誇り」をもつことが関連する。この関係性を大学・短期大学にあてはめると，図書館に収集された多くの資料に潜む魅力を発信することは，教職員の勤務はもちろん，学生の大学生活を実りあるものへ発展するよう支援する糸口になると思われる。こうした観点からも，大学図書館としての価値が感じられる。

本研究では，社会的アイデンティティ理論を参考に，「牧野富太郎博士から本学に伝わる植物分類学研究への想い」を例示して独自性が潜む話題

を取り上げた。本学図書館には，名誉教授による著書が作成された経緯や背景，さらには牧野の想いのような裏話が伝えられたその他の一般図書が多数存在している。この背景から感じる情報を大学図書館として提供するためには，展示の演出も重要になる。派手すぎても控え目すぎても，そして事実から逸脱してもいけない。読書離れが進む青年にとって，図書が並んでいても，その魅力にはなかなか気づかない。

こうした状況を踏まえ，図書課では，職員が推薦図書にコメントをつけて紹介したり，テーマに基づいて図書をそろえてメッセージを発信したりするなど，常に工夫を凝らしながら興味・関心を喚起するように努めている。データ分析による検証はしていないものの，これらの図書に対して学生が足を止めて熱心に読み，貸し出しを希望する姿も見られることから，一定の効果が確認されている。その上で，今後は本研究で紹介した試みも取り入れて工夫を重ね，図書（電子図書や電子ジャーナル等含む）へ誘われる魅力のある大学図書館として発展することを目指す。まずは，図書を通した牧野博士と本学名誉教授との結びつきから学生の誇りを育てる図書館づくりに努めていく。その成果と課題を把握しながら，多角的な視点で本学の魅力と価値を感じることのできる情報発信を行うことが大学図書館として問われる責任であることも心得ておかなければならない。

なお，実際に本研究で紹介した試みの成果を検証するためには，学生の思想をデータ化したり，図書の貸し出し以外の多様な生活実態（インターネットでの検索や図書の購入，関連するメディア視聴など）を調べたりする必要が生じる。しかし，通常の形で図書館を運営しながら，この方法で分析することはきわめて困難である。したがって，今後は，先行事例も参考に，試行錯誤による改善も交えながら，実践的記録を積み重ねて成果を考察することが課題となる。その成果を公表して議論をできる方向へ努めていく。

それでも，郷土が輩出した「日本植物学の父」とのつながりを感じることをきっかけとし，その伝統をさまざまな形で残す本学で学び，その喜びを味わうことのできる環境を構築することは，本学図書館だからこそ実施できる試みとして意義がある。類似した事例は他にも潜んでいることが予想される。大学の独自性は，大学が取り組んできた歴史と方針を丁寧に考察することによって気づかれ，その結果生まれてくる。図書館としても，自大学に関する蔵書と活動史および社会的背景から発見される価値の考察を積み重ねることによって，図書館利用を通じてどのような学生を育てる方針なのかが明確になってくると考えられる。さらに，その先として，自大学の発展へ進む方向性の１つが具体化されると推察される。

今後は，図書館による自校教育を検討した油谷（2021）などの先行研究も参考に，興味・関心から所属感を高めて誇りを抱くよう育成する図書館のあり方を追究するためには，図書館の運営に留まるだけでなく，どのような人材を育成するのかという大学全体の方針と整合性を保たなければならない。例えば，将来的には教育課程で開設されている科目の中で取り上げる建学の精神に関わる内容と，図書館で提供する自校史とのつながりを理解して深化させ，独自性を発揮する将来像を学生自身で確立することができれば，自大学で学ぶことに誇りをもつことのできる学生生活を支援する図書館としての意義がいっそう高まると期待される。したがって，今後も様々な研究分野の理論を参考にしながら，歴史や伝統を適切に記録し，社会とのつながりから本学で築かれてきた魅力を再発見することで，学生の所属感に基づく誇りを育む環境の一部として図書館には重要な意義があると位置づけていく。

利益相反

本論文について，開示すべき利益相反関連事項はない。

付　記

本論文を作成するにあたり，草稿段階で人物や出来事に関する事実関係を確認してくださった吉

村庸様に心より謝意を表します。また，資料収集や情報提供をしてくださいました高知学園大学・高知学園短期大学図書課・諏訪有香様と畠中智恵子様にも改めて御礼申し上げます。

引用文献

朝比奈泰彦（1971）．地衣類雑記（§§245-247）植物研究雑誌，*46 (9)*, 257-262.

Berlyne, D. E.（1965）. *Structure and direction in thinking*. New York: John Wiley & Sons, Inc.

Brown, J. D., & Marshall, M. A.（2001）. Self-esteem and emotion: Some thoughts about feelings. *Personality and Social Psychology Bulletin, 27*, 575-584.

地衣類観察会（2022）．地衣類ネットワークスクール　地衣類ネットワークウェブサイト（http://jlichen.com/school.htm）2022年９月29日最終閲覧

Doosje, J., Ellemers, N., & Spears, R.（1999）. Commitment and intergroup behavior. In N. Ellemenrs, R, R. Spears, & B. Doosje (Eds.), *Social Identity*. London: Blackwell, pp.84-106.

原田浩（2022）．日本の地衣類（ウェブ図鑑）　千葉県立中央博物館ウェブサイト（https: //www. chiba-muse. or. jp/NATURAL/special/chii_nihon/nihon-index.html）2022年９月29日最終閲覧

原田浩・岡本達哉・吉村庸.（2005）．日本産地衣類および関連菌類のチェックリスト *Lichenology, 4 (1)*, 55-60.

Hart, D., & Matsuba, M. K.（2007）. The development of pride and moral life. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford, pp.114-133.

早瀬良・坂田桐子・高口央（2011）．誇りと尊重が集団アイデンティティおよび協力行動に及ぼす影響：医療現場における検討　実験社会心理学研究, *50 (2)*, 135-147.

Heider, F.（1958）*The Psychology of Interpersonal Relations*. New York: John Wiley & Sons.（ハイダー, F., 大橋正夫（訳）（1978）対人関係の心理学　誠信書房 pp.156-204, pp.218-274.）

Argyle, M., & Henderson, M.（1985）. *The Anatomy of relationships: And the rules and skills needed to manage them successfully*. London: Penguin.（アーガイル, M.・ヘンダーソン, M., 吉森護（訳）.（1992）．人間関係のルールとスキル　北大路書房　pp.37-60.）

Hogg, M. A., & Abrams, D.（1988）. *Social Identification: A social psychology of intergroup relations and group process*. London and New York: Routledge.

Maslow, A. H.（1970）. *Motivation and personality. Second Edition*. New York: Harper & Row.（マズロー, A. H., 小口忠彦（訳）（1987）．改訂新版人間性の心理学　産能大学出版部　pp.221-309.）

文部科学省（2010）．大学図書館の整備について（審議まとめ）：変革する大学にあって求められる大学図書館像　文部科学省ウェブサイト（https: //www. mext. go. jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/ toushin/attach/1301607.htm）2022年９月29日最終閲覧

榊原國城・安田恭子・若杉里実（2015）．教育環境に対する大学生の満足感：私立大学のキャリア教育を考える　ナカニシヤ出版　pp.47-60.

Smith, C. (2018). A comprehensive first year engagement theory. *The 6th Annual Conference on Management and Social Science,* p.48.

Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory. In W. G. Austin, & S. Worchel (Ed.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey: Books/Cole, pp.33-47.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2004). Putting the self into self-conscious emotions: A theoretical model. *Psychological Inquiry, 15*, 103-125.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007). The psychological structure of pride: A tale of two facets. *Journal of Personality and Social Psychology, 92*, 506-525.

Tyler, T. R., & Blader, S. L. (2001). Identity and cooperative behavior in groups. *Group Process & Intergroup Relations, 4*, 207-226.

山口拓史（2003）．国立大学における自校史教育の意義：名古屋大学を事例として　名古屋大学史紀要, *11*, 91-116.

山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, *30*, 64-68.

湯川次義・久保田英助・野口穂高・大岡紀理子・大岡ヨト（2016）.「自校史教育」に関する基盤的研究　早稲田教育評論, *24 (1)*, 169-188.

油谷順子（2021）．図書館における自校教育の取り組み：東京女子医科大学図書館の場合　医学図書館, *68 (1)*, 44-49.

参考文献

Huneck, S., & Yoshimura, I. (1996). *Identification of Lichen Substances*, Berlin: Springer Verlag.

上村登（編）（1965）．南四国の自然　六月社

上村登（1973）．なんじゃもんじゃ：植物学名の話　北隆館

上村登（1994）．草と木と花と　竹葉剛・美貴（未公刊）

上村登（1999）．花と恋して：牧野富太郎伝　高知新聞総合印刷

吉村庸（1974）．原色日本地衣植物図鑑　保育社

吉村庸（2002）．二足のわらじ：私のたどった道　退職記念講演（未公刊）

吉村庸・山﨑慎作・原田正行・清原泰治（編）（1996）．短期大学からの挑戦：高知学園短期大学 教養教育の実践記録　南の風社

受付日：令和４年10月12日
受理日：令和５年１月18日

Bulletin of Kochi Gakuen University / Kochi Gakuen College, No. 53(2023) pp.29-39

Report

The Significance of a University Library as an Environment Supporting Students' Pride
-Focusing on a Collection of Books on Plant Taxonomy and Social Identity-

Hitoshi YOSHIMURA[1*], Seiji MORIHARA[2]

Abstract: This study discusses the significance of a university library that helps students feel pride in studying at their university, which holds association with certain celebrities' achievements and the school institutional history. Particularly, we focused on a collection of books on plant taxonomy and social identity. Dr. Tomitaro Makino, who has been called "Father of Japanese Botany", belonged to Kochi Prefecture, where Kochi Gakuen University and Kochi Gakuen College (hereinafter, referred to as "the Universities") are located. There are some books on plant taxonomy, written by two honorary professors at the university library. They had been directly or indirectly influenced by Dr. Makino's thought or attitudes in their process of researching for the books. Then, according to social identity theory, we guessed that the students also might feel that their universities are associated with Dr. Makino's achievements if they understand his history, in the books written by the honorary professors. As a result, they would be able to feel pride in studying at the Universities. Therefore, it seems reasonable to say that a library, offering topics for publication of collection of books, is meaningful, with respect to the contribution in making students' school life fulfilling.

Key Words: university library, pride, Tomitaro Makino, plant taxonomy, social identity

[1] Kochi Gakuen University, Faculty of Health Science, Department of Nutrition, *Email: hyoshimura@kochi-gu.ac.jp
[2] Kochi Gakuen University and Kochi Gakuen College, Library Division